

# 時標

「ヤマネを研究させてください」。1973年秋都留文科大の学生時、下泉重吉学長にお願いで以来、今に至る46年間、ヤマネの不思議を追い続け、清里では1988年から研究を積み上げてきた。長く調べてもなお不思議の多いヤマネってどんな動物なのか。

のだらう。目のくりつとした哺乳類で、体重は約18gと鶏卵(約50g)の半分もなく、体長は8cm程度、尾っぽのふさふさした毛が愛らしく、背中に1本の黒い筋がある。夜行性で、森の樹上を「棲み処」とし、枝を「道」として移動する。「超音波」も発

し、アケビなど森の果実やカナブン、ガを両足で枝に逆さまになって食べ、葉の裏を「森のスケーター」のように滑りながら葉裏にいる1cm前後のアブラムシを食べ。花粉も食べ、樹の受粉を助けるため「森の創り手」でもある。

行動範囲は5分前後の個体もある。生態系の上位に位置し、ヤマネの存在は多様な生物の棲む「豊かな森のフラッグ(旗)」である。冬は体温を0度程に下げ、約半年間、何も食わず毛鞠状に冬眠し、山梨では「マリネスミ」の方言をいただいている。起源はヨーロッパにある。最古化石はドイツの5000万年前の地層にあり、進化しながら、ヨーロッパとアジアを結ぶ森があった時代にユーラシア大陸の東端に枝をつた

## ヤマネ保護は未来を守ること



湊 秋作  
ヤマネ研究者

ニホンヤマネは日本列島に約510万年前には生息するようになり、日本列島最古参の日本特産種となった。だから、国指定の天然記念物である。現在、国内では九つの遺伝子グループが存在し、山梨のヤマネは猪苗代湖から伊豆半島まで広がる関東集団に属す

る。しかし、南アルプスの長野県側に関東集団から約90万年前に分岐した赤石集団がある。南アルプスの約100万年前の隆起と、それに伴う気候変化や森林変動が移動の障壁となり、分岐の背景となったと考えられる。1999年、山梨県教委は

県内全域や武田神社の森などにもヤマネ生息を確認した。でも今、日本全体ではヤマネの分布がパッチ状(島状)傾向となり、清里調査地では減少中である。また、国内外の道路や富士山有料道路(富士スバルライン)では、リスや動物たちの交通事故が頻発している。道路などで生息地が分断されると、動物は食物や巣や異性との出会いが損なわれ、生活基盤を喪失していく。

一方、世界では国連が2030年までによりよい地球未来のために、17個の持続可能な開発目標(SDGs)を設定。人類生存の必要条件である生物多様性を守る取り組みが世界中で展開されている。そんな中で私たちは、大成建設・清水建設・NTT東日本・キープ協会などと「森の動物との共生」の具体化を目指し、

動物の歩道橋である「アニマルパスウェイ」を開発し、05年に北杜市と共に建設した。アニマルパスウェイは今、岩手から三重、イギリスなどに普及し、ヤマネ、リスなど樹上動物が利用し、環境保全技術の山梨からの輸出ともなった。今後、アニマルパスウェイは、現在のスバルラインに加え、富士山麓で開発がある場合は必須であろう。日本の富士山からも世界に「自然との共生・SDGs達成のメッセージ」を送ることができるからである。

みなと・しゅうさくさん

1952年和歌山県生まれ。都留文科大卒、兵庫教育大学院修了、理学博士(京都大)。小学校教師を24年務めた。ニホンヤマネ保護研究グループ会長、アニマルパスウェイと野生生物の会会長、関西学院大教授。山梨県文化財保護審議会委員も務める。